

〈解題〉

ここに訳を試みたのは、「20世紀フランスの女性作家たち」と題された講演シリーズの一つとして、2001年2月28日にフランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館のホールで行われたエリザベット・バダンテールの講演である。この講演の内容はフランス国立図書館から出版されており、翻訳はElisabeth Badinter, *Simone de Beauvoir ou les chemins de la liberté*, Bibliothèque nationale de France, 2002をもとにしている。また、この講演の録画された映像は、フランス国立図書館のインターネットサイト上で (http://www.bnf.fr/fr/evenements_et_culture/anx_conferences/a.c_010228_badinter.html) 見ることができる。バダンテール自身が述べているように、この講演に続き、歴史学、女性学、19世紀の専門家であるパリ第7大学名誉教授のミッシェル・ペロー Michelle Perrot、ジャン・ポール・サルトルの専門家であり作家のアニィ・コーエン・ソラル Annie Cohen-Solalと共に、ボーヴォワールについての討論会が行われた。バダンテールは、18世紀を専門とする哲学者であり、エコール・ポリテクニクの教員でもあった。そして、ボーヴォワールの影響下に、男女の問題についての独自の思索を発表し続けている。

2010年、バダンテールは「母性」は本能ではないと主張して論議を呼んだ *L'amour en plus. Histoire de l'amour maternel du XVIIe au XXe siècle* (Flammarion, 1980) [邦題『母性という神話』鈴木晶訳] から30年を経て、再び母性を主題にした *Le Conflit, la femme et la mère* (Flammarion, 2010) を出版した。その間、2003年に出版された *Fausse route : Réflexions sur 30 années de féminisme* (Odile Jacob, 2003) [邦題『迷走フェミニズム —— これでいいのか女と男』夏目幸子訳] によって、バダンテールは、フェミニストを敵に回すことになる。バダンテールが、*Fausse route*、即ち、間違っただ道を辿っている者として、自分たちの反対の性を糾弾するフェミニストたちを批判したからだ。バダンテールが求める道は何か。それが、簡潔に、明快に、他のバダンテールの書物と並んで、ここに訳した2001年の『自由への道』と題された講演の中に現れている。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの名の下に行われたこの講演のあった2001年、日本では『第二の性』の新しい翻訳が出版された。21世紀に『第二の性』を読む必要性について非常に意識的であった日本のフェミニズムとバダンテールの意図とは見事に呼応している。バダンテールが講演の中で呼びかけている西洋の女たち、とりわけフランスの女たちが現在手にしている自由は、日本の女たちの比にならない。彼女たちが考えるべきこと、なすべきことと、我々のそれはおそらく異なる。しかし、バダンテールは、日本の女たちこそが享受しうる思考をここに展開しているようにも思われるのだ。我々にとって本当に有益であるのは、バダンテールを批判すること、あるいは、バダンテールの主張をそのままに唱えること、そういったことよりも、バダンテールの思考の方法そのものについて考えてみることではないか。そこにこそ、我々が「できること」のヒントが隠されていると私は思う。

ボーヴォワールと共に、フェミニズム・ユニヴェルサリスト（普遍主義者）の立場にバダンテールは立ち、「真実」とは何かを問う。この態度は、バダンテールにおいて一貫している。自己愛やコンフォリズムを自己の思考から遠ざけること。感情的にならずに、ものごとのおかしな点を問うこと。あらゆる批判に理性的に答えること。そして、個人の思考と、科学的、統計的真理の力によって、「偽」を排除し、真実に近づく努力を続ける。そのような努力の結果、精神に出現してくる女の姿は、現実の女とは異なる。現実の女は、真実の女ではない。我々は、現実を生きる。そして、そのことが、精神に現

れた真実を生きようとするのを妨げるような社会で本当によいのか。今日、高度な教育を受ける機会に恵まれた日本の女性が、自らの知性を持って、このような問題に立ち向かうとき、ボーヴォワール-バダンテールの知のモデルこそが有用ではないだろうか。

講演の冒頭に断っているように、バダンテールは自らのボーヴォワールについて語る。バダンテールは、『第二の性』の、そしてその著者であるボーヴォワールの、一つの解釈を提出する。バダンテールは、自らの深い愛情によって、しかし、「真実」であることの責任を果たしながら、ボーヴォワールの生を物語る。そして、シモーヌ・ド・ボーヴォワールとジャン＝ポール・サルトルのなすカップルの、我々が既に知っている「神話」の仕組みに言及しながら、バダンテールは、ボーヴォワールという作品を「読む」。ボーヴォワールは、女たちに自由を与えただけではなく、我々にその存在を解釈する自由をも与えた。バダンテールは、ボーヴォワールによって与えられたそれらの自由をこの講演の中で享受しているようにも見える。そして、それらの自由を、多くの人々と分かち合うことを願っているようにも見える。

最後に、この講演の翻訳を快く快諾してくださったエリザベット・バダンテール氏に心から感謝申し上げます。

(すなば・ますみ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻
博士後期課程)

掲載決定日：2010（平成22）年12月10日